

1996年（第28回）東京女子医科大学*1

細田 瑳 —*2

第28回大会は、1996年7月17日（木）、18日（金）の2日間、東京女子医科大学講堂において開催され、総数554名（学外344名、学内210名）の方が参加され、100題を越える演題で盛会であった。

1. 大会長の急逝と大会長講演

大会を目前に控えた7月8日、大会長の吉岡守正学長が急逝され、鈴木淳一会長はじめ学会役員の方々の特別の配慮で、会場に遺影を掲げ、開会に先立って黙禱を捧げ、準備の段階で企画指導をいただいた方針に従って円滑に大会を運営することができた。

故吉岡守正学長が第28回大会長を受けられたのは、1990年以来、東京女子医科大学で新カリキュラム（MDプログラム90）を導入し、このカリキュラムでの初めての卒業生を'96年3月に送り出す時期に当たっていたことも1つの理由であった。

大会の企画に当たっては、「特色ある医学教育の実践と展開」を基調テーマとし、チュートリアル教育、統合教育、人間関係・態度教育、そして女子医科大学に関連して21世紀に望まれる女性医師像を中心的話題としてとりあげ、各大学・研修病院における特徴ある取組みと実践の評価を比較検討できる機会とした。

大会長講演は、大会長が逝去された4日前に病室でビデオ収録させていただき、30分に編集して正面スクリーンの左半分には放映し、右半分には図表のスライドを投影する形で、講演に近い形とし、

鈴木会長に座長の労をおとりいただいた。演題は、「教育の質」と題して、1. 学校側が提供するプログラムの内容、2. 教師側の教育プログラムを理解し協力する姿勢、3. 学生側のプログラムを消化実践する意欲、4. 在学生および卒業生に見られる成果の正しい判定の4つの項目に分けて述べられた。「わが国高等教育の大綱化を受けて、各大学がそれぞれの教育の理念に基づいて具体的目標を掲げ、卒前・卒後教育の連携を意識しつつ、常に教育改善の意欲を持って教育の能率向上を目指さなければならない。教師はそのことを十分認識して教育技法を研修して、学生から能力を引き出すという（education, Erziehung）本来の意味を実現し、教えようとするのではなく「学育」（学び育て）の精神で当たるべきである。医学教育におけるもっとも重要な決定的要素はカリキュラムや講義ではなく、学生と教師の共同作業であるとのRappleye氏の言葉を引用された。大学が欠席の多い学生を看過して学生を惹きつける教育を行うことを怠けていることは大いに反省すべきである。わが国の初等教育からの spoon feeding を転換し、学生と社会のニーズを考慮に入れて巧みに動機づけできる教育をすすめる、学生の勉学意欲を持続させることが大切で、学生の過半数が大学の用意したプログラムに乗るようにして習慣化できれば望ましい教育になる。医療に携わる者の教育には知識はもちろんのこと、技能、倫理観を含む価値観、それに態度の能力育成が同等に重要であり、在学生を学力判定のみで評価するのではなく、学生のパフォーマンスを分析し、向上の有無や水準を逐次フィードバックして学生自身に励みを与え、卒後のパフォーマンスと比較して教育側の反省要因とするなど多彩な研究が今後必要である。大学受験人口が減少する21世紀に向けて先見性のある教

*1 The 28th Congress of Japan Society for Medical Education (1996), Tokyo Women's Medical College キーワーズ：日本医学教育学会大会、第28回、1996年

*2 Saichi HOSODA 榊原記念病院

育計画に力を注ぐべきである」と述べてその信念を吐露され、会場を埋めつくした参加者の方々に、さまざまな感慨を呼び起こされ本大会のクライマックスとなりました。この記録はビデオ収録して、学会員および希望者に配布した。

2. 大会の概要

シンポジウム「統合教育の実践」では基調講演のあと、統合の枠組みと視点、統合教育の形態とその相互関係について討論され、統合教育を実践する問題点と改善への指針が模索された。パネルI「21世紀に望まれる女性医師像」では全国の女性医師2万7千余名のアンケート調査を対照群として抽出された男性医師一千名へのアンケートと比較分析した結果が報告され、教育・地域医療・看護・患者の立場でのパネリストからそれぞれ提

言がなされた。パネルII「テュートリアル教育におけるテュータのあり方とその養成」では教員養成プログラムの実態が、日本と韓国から報告された。さらにワークショップ「人間関係・態度教育の現状と将来」では、早期臨床体験学習・臨床診断学実習における人間関係学習の導入に関するビデオが各施設から紹介され、参加者が入りきれないほどの盛況で熱心な討論が聞かれた。要望演題は分子生物学教育における実習、国際協力、チーム医療、ターミナルケアの4題に対して21題の報告があった。一般演題も、54題の応募があり、幅広い実質的な討議が持たれた。

学会総会は1日目の午後冒頭に開かれ、医学教育学会からの牛場賞が堀原一会員に、医学教育振興財団からの懸田賞が森田孝夫会員にそれぞれ授与された。

* * *